

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：14302
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22730617
 研究課題名（和文） リテラシー教育における機能的側面と批判的側面に関する総合的研究
 研究課題名（英文） A Study on literacy education about functional and critical facets
 研究代表者
 樋口 とみ子 (HIGUCHI Tomiko)
 京都教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：80402981

研究成果の概要（和文）：本研究では、公教育（とりわけ初等中等教育段階）において育成すべき学力のあり方について、リテラシー概念に焦点をあてて考察した。歴史的な視点と現代的な比較の視点を用いることにより、リテラシーの機能的側面と批判的側面の統合に向けた理論と実践を検討した。その結果、ユネスコの「自由としてのリテラシー」という発想に可能性を見出すとともに、背景にある「状況に根ざしたリテラシーズ」論の特徴も明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine the facets of literacy education to think about academic achievements thorough public education, especially primary and secondary education. Using the historical and comparative perspective, the integration of the functional and critical facets of literacy theory and practice is explored. I insist that the concept of “literacy for freedom” presented by UNESCO has a possibility, and clarify features of background theory, “situated literacies.”

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：教育学、学力論、リテラシー

1. 研究開始当初の背景

(1) リテラシー概念への注目の高まり

2000年以降、OECD（経済協力開発機構）が実施している国際比較調査に PISA（Programme for International Student Assessment）がある。PISA は、15 歳の子ど

もたちを対象に、これからの社会を生きていく力を測ろうとする際、「リテラシー」という言葉を用いている。

この PISA の影響を受けて、日本では、リテラシー概念への社会的関心が高まった。学校教育を通して子どもたちに育てたいもの

とはいったい何なのか。この問いを考える上で、リテラシーという言葉の検討は、いまや避けて通ることのできないものの一つとなりつつある。

日本では、リテラシーという言葉は、「応用力」や「活用力」という意味で理解される傾向にある。たとえば、PISAの数学的リテラシーは「数学的活用力」、科学的リテラシーは「科学的応用力」と言い換えられる場合がある。また、読解リテラシーに関しては、「PISA型読解力」という言葉がひろく用いられ、日常生活の具体的な場面・状況のなかで読み書きを活用することに光が当てられている。

(2) リテラシーとは何か

しかしながら、リテラシーとは必ずしも「応用力」や「活用力」のみを意味するわけではない。

もともと、リテラシーという言葉は、「読み書き能力」を意味して登場した。1880年代のアメリカ合衆国において、公教育制度が普及していくなか、学校に通う子どもたちに共通に身につけさせたい教育内容、すなわち初歩的な読み書きのスキルを意味して登場したと言われている。

その後、130年以上に及ぶリテラシー概念の展開のなかで、人々が読み書きすることの意味をめぐり、さまざまな見解が提出されてきた。

筆者は、これまで、リテラシー概念の歴史的展開を追うなかで、リテラシーには機能的側面と批判的側面という二つの契機があることを明らかにしてきた(樋口とみ子「生きる力と学力」田中耕治・井ノ口淳三編『学力を育てる教育学』八千代出版、2008年)。

より具体的にいえば、リテラシーの機能的側面とは、読み書き能力が単に初歩的なスキルの獲得にとどまらずに日常生活のなかで生きてはたらく機能的なものとなることに光をあてるものを指す。ここでは、実際の生活のなかで効果的に読み書きのスキルを応用することがめざされる。この機能的側面を重視する代表的な主張としては、W.S. グレイの機能的リテラシー (functional literacy) 論を挙げることができる。

一方、リテラシーの批判的側面とは、社会に潜む支配―従属構造や権力関係を批判的に読み解いていくことを重視するものである。読み書きに埋め込まれた政治性を告発するこの立場の代表的論者は、P. フレイレである。フレイレの主張は、その後、批判的リテラシー (critical literacy) 論の大きな動きを作り出すに至る。

これらのリテラシー論を検討するなかで、筆者は、従来、切り離して検討される傾向にあった両側面を統合する道筋を模索する必

要があるのではないかと考えるに至った。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、リテラシー概念をめぐる見解の相違、すなわち、機能的側面を重視する主張と批判的側面に重きをおく主張の違いを踏まえた上で、両者の統合のあり方を明らかにすることを目的とした。

この目的にアプローチするために、①これまでのリテラシー概念の展開をとらえなおす歴史的視点と、②近年の新しい動向を追う現代的な比較の視点を用いた。両視点をともに用いることを通して、リテラシー教育に関するさまざまな主張のなかで、機能的側面と批判的側面がどのように位置づけられているのかを鮮明にしていくことを試みた。

本研究を進めることにより、PISAのリテラシー概念を対象化するとともに、これからの公教育(とりわけ初等中等教育段階)を通して子どもたちに育てたい学力のあり方について示唆を得ることをめざした。

3. 研究の方法

従来のリテラシー研究においては、リテラシーの機能的側面と批判的側面のどちらか一方に依拠して、各リテラシー論が取り上げられる傾向にあった。

それに対して、本研究では、以下に述べるように、歴史的な視点とともに、現代における比較の視点を持ち、リテラシー教育の機能的側面と批判的側面の統合のあり方についての検討を進めた。

(1) 1950年代以降の機能的リテラシー論の展開【歴史的な視点】

①まず、1950年代に提起されたグレイの機能的リテラシー論を取り上げた。グレイの主張はOECDのPISAのなかで示唆に富むものの一つとして参照されている。

そこで、本研究では、グレイの機能的リテラシー論において提起される機能的側面の特徴を再検討するとともに、リテラシーの批判的側面がどのように位置づけられているのかを明らかにすることをめざした。

より具体的には、グレイの提起した「成熟した読み」の指標化に着目した。グレイの主張はリテラシーの機能的側面をはじめて体系的に論じたものであることが紹介されてきたものの、グレイが実際に実施した「読みの習熟度」に関する調査の中身は十分に明らかにされてこなかった。

初歩的なレベルにとどまらない「成熟した読み」のなかで、リテラシーの批判的側面はどのように位置づけられたのか。この点を明らかにするため、人々のリテラシー実践を調

査することを通してグレイが打ち出した「読みの習熟度」を測るための指標の内実に迫った。これにより、彼の構想したリテラシーの機能的側面と批判的側面の統合の様相を明らかにすることを試みた。

②次に、グレイの主張を1950年代に取り入れつつも、のちに、リテラシーの批判的側面を重視するフレイレの発想にも学んだユネスコのリテラシー論の展開を検討した。

1946年に設立されたユネスコは、1950年代にはグレイの機能的リテラシー論をもとに、リテラシー概念を定義していた。さらに、1960年代中ごろからは、「実験的世界リテラシー計画」を実施し、機能的リテラシーの意味を、経済的な生産性の向上と同義のものとしてとらえる傾向があった。

だが、70年代中ごろには、「実験的世界リテラシー計画」の成果が芳しくなかったこともあり、リテラシー概念の転換を試みる。つまり、既存社会への適応ばかりをうながすのではなく、むしろ現実に対する批判的認識と社会変革を視野に入れるべきだというフレイレの発想を取り入れたのである。この時点で、ユネスコは機能的リテラシーから批判的リテラシーへと舵をきったという理解がこれまでにはなされてきた。

では、その後のユネスコは、どのようなリテラシー概念を打ち出しているだろうか。この点を、機能的リテラシー論や批判的リテラシー論との関連から明らかにしようとする先行研究は管見の限りなかった。そこで、歴史的展開を踏まえて、90年代以降のユネスコのリテラシー概念の特徴を明らかにすることをめざした。

(2) 「状況に根ざしたリテラシー論」の展開【現代的な比較の視点】

ユネスコの近年のリテラシー概念に影響を与えた考え方の一つに、「状況に根ざしたリテラシー論」がある。現代的な比較の視点を用いて、最近のイギリス等で提唱されている「状況に根ざしたリテラシー論」の特徴を明らかにすることも試みた。

筆者は、主に現代アメリカ合衆国に焦点をあてて、リテラシー論争の論点を読み解く研究を行ってきた（樋口とみ子『現代アメリカ合衆国におけるリテラシー論議の再審』2006年京都大学大学院教育学研究科提出：学位論文）。本研究では、さらに、現代的な比較の視点として、イギリス等へと視野を広げた。

具体的には「状況に根ざしたリテラシー論」の代表的論者であるD. バートンとM. ハミルトン、B. V. ストリートらの主張を取り上げた。とりわけ、リテラシーが複数形でとらえられる根拠を探究するとともに、リテラシーの機能的側面と批判的側面の位置づけ

について検討をした。

以上のように、本研究を進めるにあたっては、リテラシーの機能的側面と批判的側面の統合のされ方に関して、歴史的な視点と現代的な比較の視点をともに用いて、総合的に検討するという工夫をした。

4. 研究成果

当初（2010年度・2011年度）は歴史的な視点を中心としつつ、その後（2012年度）、現代的な比較の視点を融合して検討を進めた結果、次のような内容が明らかになった。

(1) 歴史的視点

①グレイの機能的リテラシー論

先述のように、リテラシーという言葉は、当初は「文字の読み書き能力」を意味していた。その意味内容を、日常生活との関わりからとらえなおし、効果的に読み書きのスキルを活用できるかどうかというレベルを視野に入れる必要性を提起したのが、1950年代のアメリカ合衆国のグレイである。

ただし、グレイの主張は、既存社会への効果的な適応をうながすのみでなく、学習者一人ひとりの主体的な意志決定やコミュニティの問題解決、さらに「批判的読み」なども含め、幅広い視野からリテラシーの機能的側面をとらえようとするものであった。

グレイは、「成熟した読み」の内実をとらえるため、日常生活のなかで人々が読み書きに関してどのような実践を行っているのかを明らかにする調査を実施した。具体的な場面での人々の行動を観察したり、インタビューしたりすることにより、「成熟した読み」の指標化を試みたのである。

その調査のなかで、グレイは、「成熟した読み」の特徴をとらえるために18の規準を作成したことが明らかになった。たとえば、「読むことへの熱意をもっているかどうか」、「直接には書かれていない意味の認識を通して文字に書かれた意味の理解をより豊かにする力をもっているかどうか」、「読んだ内容についての価値や質、正確さについて探究しようとする態度をもっているかどうか」、「読んだ内容について結論を導く際に、判断を保留したり適切な基準を用いたりする傾向をもっているかどうか」などが重要な規準とされた。

これらには、リテラシーの機能的側面のみならず、批判的側面を重視する発想も反映されていることが浮き彫りとなった。

けれども、「成熟」とは、到達点ではなく、よりよいものを求めようとする「態度」や「興味」であるとされたことにより、個々人の内面（努力など）に問題が焦点化していく傾向にあったことを指摘した。すなわち、リテラシーの機能が、結局のところ、態度や意欲

などの「個人の内面」の問題に還元化されたのである。そのため、個人をとりまく社会との関係を視野に入れて既存の社会構造を根本的・批判的に問いなおす地平には結びつきにくかったといえる。

以上の研究結果は、これまでの機能的リテラシー論に関する理解に対して、その課題をより鮮明にすることができるものと考えられる。

②ユネスコのリテラシー概念の展開

グレイの機能的リテラシー論を取り入れつつ、その後、リテラシーの批判的側面を重視する主張を取り入れていったのがユネスコである。

ユネスコは、1946年の設立以来、いわゆる発展途上国を中心として世界各国におけるリテラシー教育の普及に大きな役割を果たしてきた国際機関である。最近の「国連リテラシーの10年」(2003~2012年)においても、ユネスコは主導的な取り組みを行ってきた。

ユネスコの設立時、リテラシーは、読み書きのスキルとして、すなわち書き言葉における解読・文字化のスキルとしてとらえられていた。1950年代後半になると、ユネスコはグレイの主張を受けて、機能的リテラシー論を採用した。それは、実際の日常生活での効果的な読み書きの使用に光をあてるものであった。

その後、60年代の経済開発重視の時代背景のなかで、発展途上国を主な舞台とする「実験的世界リテラシー計画」をユネスコは実施した。ここでは、機能的リテラシーの概念が、経済的な生産性の向上と結びつけて強調された。

しかしながら、そのようなリテラシー概念は結局のところ、学習者個々人のニーズを考慮に入れていないのではないかという点が問題視されることとなる。

そこで、1970年代中ごろには、抑圧からの学習者の解放を世に訴えたフレイレの批判的リテラシー論をユネスコは採用することとなった。

その後、1990年には、ユニセフなど他の国際機関と協力して、ユネスコは「万人のための教育世界会議」を開催した。この会議において、リテラシーは「基礎的な学習ニーズ」の一つとして位置づけられた。

さらに、2000年に入ってからユネスコは、「複数形のリテラシーズ」という発想を打ち出しはじめている。それは、あるべき唯一のリテラシーをすべての人に普及させるというのではなく、つねに様々な社会的文脈のなかで埋め込まれたものとしてリテラシーをとらえることを意味している。リテラシー教育は学習者それぞれが置かれている文脈の複数性を考慮せねばならないというわけ

である。

とりわけ、最近の「複数形のリテラシーズ」という発想を具現化するプログラムの一つとして推奨されるのがリフレクト・アプローチであることを、本研究では明らかにした。

リフレクト・アプローチは、1990年代中ごろから、ウガンダやバングラデシュ、エルサルバドルなどで始まったものであり、最近では、およそ70か国500団体によって実践されているという。

リフレクト・アプローチにおいては、フレイレの思想とともに、参加型農村調査方法(Participatory Rural Assessment)で開発された方法論が取り入れられている。非識字者が排除されることのないよう、学習者の既存の知識と経験を尊重し、主体的な参加をめざすのである。また、リテラシー教育を地域社会のさまざまな発展の目標と結びつける点も特徴である。

リフレクト・アプローチには、前もって決められたシークエンスはない。学習の内容は、つねに学習者それぞれを取りまく複数の文脈を尊重して生み出されていく。そのなかで、読み書きのスキルは、それのみを取り立てて指導するのではなく、省察や行動の能力と統合されている。

さらに、リフレクト・アプローチはリテラシーの様々な側面に光をあてている。たとえば、社会に潜む権力関係を批判的に分析するとともに、生活のなかで効果的に活用したりする機会を用意していることも鮮明となった。リテラシーの複数の側面、すなわち機能的側面と批判的側面を統合する実践を生み出していると考えられるのである。

だが、このことは単にあれもこれも取り入れるということの意味するわけではない。リフレクト・アプローチにおけるカリキュラム開発のあり方は、新しく「自由としてのリテラシー」という概念へとつながっていることを指摘した。

「自由としてのリテラシー」とは、社会的正義と自由の拡大に向けた闘いにリテラシーが貢献するものとなることを重視する概念である。背景には、アマルティア・センの著作『自由としての開発』(*Development for Freedom*)の影響がある。センは、ケイパビリティという概念を提起し、人々が「生き方の幅」を広げることのできるような社会発展のあり方を世に問うた。

リフレクト・アプローチは、「複数形のリテラシーズ」を、「自由としてのリテラシー」という発想へとつなぐものである。ユネスコも、近年の「複数形のリテラシーズ」という概念を「自由としてのリテラシー」へと発展させようとしていることが、本研究では明らかになった。

(2) 現代的な比較の視点

近年のユネスコが参照するリテラシー論の一つに、「状況に根ざしたリテラシーズ」論がある。

「状況に根ざしたリテラシーズ」論とは、1980年代後半あたりから、イギリスやアメリカ合衆国、オーストラリアを中心に広がっている「新しいリテラシー研究 (New Literacy Studies)」の流れに位置づくものである。

「新しいリテラシー研究」とは、従来のように普遍的な読み書きのスキルの獲得に焦点をあてるよりも、むしろ、多様な「社会的実践 (social practice)」として読み書きの意味を考察しようとする動きを指す。個体中心主義ではなく、関係論的相互依存性に配慮する発想である。

関係性に埋め込まれた社会的実践に光をあてる「新しいリテラシー研究」によれば、時と場所によって変わるものとして、また権力関係のなかで議論されるものとして、「多様なリテラシーズ (multiple literacies)」という概念が重視される。唯一のあるべきリテラシー像を模索するのではなく、多様なリテラシーのあり方を記述型で蓄積していくような研究が進められてきた。

そのなかで、とりわけ読み書きをめぐる「状況」や「文脈」の特徴を具体的な人々の生活に即して描き出そうとしているのが、「状況に根ざしたリテラシーズ」論である。

「状況に根ざしたリテラシーズ」論の代表的な論者の一人は、イギリスのランカスター大学のバートンである。バートンは、読み書きが生活の「文脈」のなかに埋め込まれていることを重視するとともに、「ローカル・リテラシーズ (local literacies)」という概念を提起している。社会的な実践として読み書きが行なわれる「状況」を、上からの支配に覆い尽くされない、具体的で多様な「ローカル」という視点からとらえようとするのである。

たとえば、イギリスのランカシャーにある一都市ランカスターに住む人々のつくり出しているローカルなリテラシー実践をバートンらは描写してきた。

しかしながら、グローバル化の進む先進工業国において、なぜ「ローカル」という概念をバートンは重視するのだろうかという問いが生まれてくる。そこで、本研究では、「ローカル」概念の背後にあるものを明らかにすることを試みた。

その結果、リテラシーのエコロジカル・アプローチという発想が関係していることが浮き彫りとなった。エコロジカル・アプローチとは、グローバリゼーションの進むなかで支配的なリテラシーが強制されるのに対して、人々が独自のリテラシー実践を下からつくり出していくダイナミズムに光をあてる

とともに、言語の多様性の保持を志向するものである。

バートンの主張する「状況に根ざしたリテラシーズ」論には、グローバリゼーションの影響下で支配的なリテラシーが普遍的なものとして押しつけられることに対する批判がある。代わって、人々がローカルな文脈で独自の読み書きの実践をつくりだすことにリテラシーの機能的側面が見出されていると考えられる。

(3) 今後の展望

以上のように、本研究では、従来は個別に切り離して検討される傾向にあったリテラシーの機能的側面と批判的側面について、歴史的視点と現代的な比較の視点をを用いて総合的にとらえなおすことを試みてきた。

その結果、それぞれのリテラシー論における機能的側面と批判的側面の位置づけが鮮明となり、両者を統合する道筋を、ユネスコの「自由としてのリテラシー」という発想に見出すことができた。機能的リテラシー論と批判的リテラシー論、それぞれの歴史的展開をふまえた上で「自由としてのリテラシー」という発想がもつ意義については、科学研究費の最終報告書に冊子としてまとめることができた。

翻って、学校教育を通して子どもたちに育てたい学力の中身を考えていく際、「自由としてのリテラシー」という発想をもとに、子どもたちの「生き方の幅」(セン)を広げるような実践が求められているといえるだろう。

今後は、本研究で行った歴史的な視点にもとづく分析を踏まえつつ、現代的な比較の視点の幅をより広くもつことにより、検討を進めたいと考えている。たとえば、本研究の成果をもとに、最近のユネスコと OECD のリテラシー論の共通点と相違点を検討することを通して、国際的な動向をより鮮明にしていけることができるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 樋口とみ子『『状況に根ざしたリテラシーズ』論における『ローカル』概念: D. バートンのエコロジカル・アプローチに焦点をあてて』『京都教育大学紀要』第123号、2013年、1-17ページ(掲載予定)、査読無。
- ② 樋口とみ子『リテラシー教育における機能的側面と批判的側面に関する総合的

研究』科学研究費補助金最終報告書、2013年、1-105ページ、査読無。

- ③ 樋口とみ子「書評『パフォーマンス評価入門』『教育展望』第58巻第6号、2012年、52ページ、査読無。
- ④ 樋口とみ子「ユネスコにおけるリテラシー概念の展開：リフレクト・アプローチに着目して」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第21号、2012年、43-55ページ、査読有。
- ⑤ 樋口とみ子「W. S. グレイのリテラシー論における機能について：『成熟した読み』の指標化に焦点をあてて」『京都教育大学紀要』第119号、2011年、33-48ページ、査読無。
- ⑥ 樋口とみ子「書評『リテラシーの地平』」日本教育学会紀要『教育学研究』2010年、311-312ページ、査読無。

〔学会発表〕（計3件）

- ① 樋口とみ子「最近の能力論の展開から見えるもの」京都教育大学フォーラム、2013年3月8日、キャンパスプラザ京都。
- ② 樋口とみ子「探究学習のパフォーマンス評価」日本理科教育学会近畿支部大会公開シンポジウム、2010年11月27日、京都教育大学。
- ③ 樋口とみ子「リテラシー概念の展開：機能的リテラシーと批判的リテラシー」日本教育学会ラウンドテーブル、2010年8月22日、広島大学。

〔図書〕（計3件）

- ① 樋口とみ子「生活科・総合的学習の教育方法学的意義」「評価はどうあるべきか」京都教育大学教育支援センター「生活科・総合的学習」研究会編『生活科・総合的学習の理論と実践』東京教学社、2013年、19-26ページ、35-42ページ。
- ② 樋口とみ子「アメリカにおけるパフォーマンス評価」田中耕治編著『パフォーマンス評価』ぎょうせい、2011年、188-193ページ。
- ③ 樋口とみ子「リテラシー概念の展開：機能的リテラシーと批判的リテラシー」松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか?』ミネルヴァ書房、2010年、80-107ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋口 とみ子 (HIGUCHI Tomiko)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80402981

(2) 研究分担者 なし